

「きらり！！」 そのとき、目は光った。



朝食で身も心も温め、予定より10分ほど遅れて8時過ぎにホテルを出発した。

ロビーで支配人さんに見送られバスに乗り込むと、正面玄関前にホテルの方全員が並び、手を振り笑顔で送り出してくれた。子ども達も精一杯手を振ってそれに応えながら、ホテルを後にする。



丘の上にあるホテルと国道をつなぐ連絡道のカーブにさしかかったとき、陰からホテルの制服を着た人がひょこっと現れて、最後の見送りをしてくれた。

本当に、身も心も温かくなってくるのであった。

『光陰矢のごとし』

楽しいときはあっという間に過ぎて、バスで絶壁急坂ぐねぐね山道を超えて祖谷かずら橋を渡った後、いくつもの修学旅行とおぼしき団体に混じりながらレオマワールドを堪能し、最後の見学場所、四国水族館に辿り着くのであった。

多分に説明的ではあるが、“辿り着く”とは心情を含む表現であり、最近の諸事情による運動不足の結果生じた体力の著しい低下にともなう肉体的な症状、要するに疲れていたなのであるが、そんな大人をよそに、子ども達は元気に館内を見て回り、出口に待ち構えている“お土産売り場”へとなだれこんだ。





「あと〇〇円残っているからなあ。」
どうやら、みんな結構な額のお小遣いが残っているようである。

ここで、いつも堅実な S 郎くんが勝負に出た。

「先生、ぼく、これやってみようかな。」
そう言うと、茶筒を腰ほどの高さまで大きくしたような円筒形の水槽を指さした。その上部には、貯金箱のように細長い切れ込みが入っている。

「コインを買って、それを上の穴から下に向かって落とすんです。水の底にあるコップの中に入ると賞品がもらえるんです。」



S 郎くんの指から離れたコインは、右に左に揺れ、くるくると回転しながら落ちていった。

しかし、無情にもコインはコップとは違う方向に。

その時、ほんの一瞬、S 郎くんの目が光ったような気がした。すると、コップの手前でコインは、ひらりと向きを変え……。



3分後、S 郎くんの手には、ペンギンのぬいぐるみが抱かれていた。

帰路のバスの中、子ども達は一心にビデオ映画を鑑賞し、ミニオンズとともに、修学旅行は幕をとじるのであった。

<おしまい>